

成田孟さんのこと

(株)データ工学
喜多尾 憲助

ENSDF (評価済み核構造データ・ファイル) をユーザー向けに加工する γ 線表の作成仲間の一人であったアイソトープ協会の一宮さんを脳内出血で亡くし、成田さんと共に、葬祭場で見送ったのはつい2月のことであった。一宮さんがほぼ毎晩2時3時まで自宅でワークステーションに向かい、亡くなった日も、払暁まで仕事をしていた。そのことを聞いた成田さんは「無理が祟ったのですよ。医者にも見てもらっていなかったじゃないかな」とあまりにも早い死を惜しんでいた。その成田さんが一宮さんと同じような病気で亡くなるとは考えてもみなかった。前に心臓を患って手術をして以来、健康には随分気を付けていたようだったのに。

今年も間もなく核データ研究会がある。研究会での成田さんはスピーカーにマイクを渡したり、呼び出しのOHPを映したり、研究会の裏方をこなしていた。紺色の毛糸のチョッキを着た、お腹のせり出した彼を、もう見るができない。

小生が彼とはじめて会ったのは、われわれがENSDFのために、放射性崩壊や核反応の実験データの評価をはじめた1977年のことだから、20年来の知り合いということになる。この仕事の初めのころは、コーディングシートの一冊に準位一つ、次の行にその準位を脱励起する γ 線を書き込むというようにして、それをパンチカードに写し、原研の大型計算機で読み込んでデータ・セットを作った。そして準位のエネルギーを γ 線エネルギーから最小二乗法により再計算したり、内部転換係数や、ベータ崩壊の分岐比や ft 値などを計算する。これら計算の統一的手法やフォーマットのチェックなどのソフトのソースプログラムは、ENSDFを維持管理している米国から磁気テープで送られてくる。それを原研の大型計算機に載せ、コンパイルしバグをつぶし、われわれ評価グループのメンバーが端末からそれらのプログラムを使用できるようにすること、つまり評価作業を支援することが彼の仕事だった。1991年彼と一緒に、ENSDFに掲載されている γ 線のうちエネルギー準位に組み込まれていない γ 線、つまり未だ所属が確定していない γ 線を網羅した表を作ったのも、彼のプログラミング能力を頼みにした仕事である。又米国から送られてくるデータによって原研所蔵のENSDFやNSR (核構造文献) ファイルを更新したり、リクエストに応じてこれらのデータを提供するなどといった仕事も彼が受けもった。崩壊データなどで世話になった人は、原研の内外を問わず大勢いるはずだ。

LANの時代に入ると彼はインフラの整備に努力していた。電話回線で家から大型計

算機に入ることができるという、いろいろ教えてくれたが、申し訳ないがいまだに試していない。評価作業をはじめたころは、時々東海へ出かけて行って計算機の端末にさわる程度だったから、キイの操作や順序など次に行く頃には忘れてしまう。そのつど「成田サーン」だった。「又か、しょうがねえなー」という顔をしながらも、よく面倒をみてくれた。その後パソコン上でプログラムを走らせるようになり、大型計算機に頼ることも少なくなってきたし、自分でパソコンを買えるような時代になったが、パソコン・プログラムでも彼にいろいろ教えてもらった。

むろん計算機だけではない。原研からの帰り、東海の駅前などで一緒に一杯飲んだとき食べたサンマの刺し身やマグロのカマを焼いたものなどは、彼のおすすめだった。一緒につついたあんこう鍋も、こっちが言い出したことすら失念していたのに、後日忘れずに予約してくれたものだった。しかし酒の上といえ、とかく話題に上り勝ちの職場の不満めいたことなど、一度たりとも彼の口から聞いたことがない。中国語の勉強の成果を中国で試したときの話や奥さんの研修旅行についていったニュージーランドのことなど、ひとときの憩いにふさわしい楽しい話ばかりだった。最後に彼に会ったのは、5月のことだった。そのときは例の核データ・センターの、部屋にいた彼に一言二言、声を掛けただけで別れた。こんなことになるのならゆっくり酒を酌み交わしておくのだった。残念でならない。

成田孟さん、静かに眠り給え。でも、ヘルプをクリックしたら、どうか画面にでも現れて相談に乗ってくれたまえ。

(1998.9.15)